TOP MUSEUM
東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM
153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Yebisu Garden Place, 1-13-3 Mita Meguro-ku Tokyo 153-0062
TEL 03-3280-0099　FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

2021/7/15

宮崎 学　イマドキの野生動物

Miyazaki Manabu: Wild Animals Now

2021 年 8 月 24 日(火)―10 月 31 日(日)

《ツキノワグマのカメラマン、長野県、中央アルプス》2006 年／《テン》2017 年　ともに〈イマドキの野生動物〉より　作家蔵

東京都写真美術館では、「宮崎学 イマドキの野生動物」を開催いたします。

宮崎学（1949-）は中央アルプスの麓、長野県上伊那郡南向村（現・中川村）に生まれ、伊那谷の自然豊かな環境を活かし、1972 年よりフリーの写真家として活動を開始しました。「自然界の報道写真家」として、現在も日本中の自然を観察しています。

宮崎は動物たちの通り道に自作の赤外線センサー付きのロボットカメラを設置し、撮影困難な野生の姿を撮影した〈けもの道〉のシリーズなど、哺乳類、猛禽類の撮影において独自の分野を開拓してきました。また、人間の生活空間近くに出没する野生動物や、外来動物の影響など、動物の生態を通して人間社会を浮き上がらせる社会性のあるテーマにも取り組んでいます。シリーズ最新作となる〈新・アニマルアイズ〉〈君に見せたい空がある〉は「動物たちの住む森を動物の目線で見る」をコンセプトに、動物たちの痕跡を注意深く読み解き、自作のロボットカメラで人間の目が及ばない世界をみごとに写し出しています。本展覧会は、半世紀近くにわたる宮崎の作家活動の軌跡をたどりながら、黙して語らぬ自然の姿を浮き彫りにしようとするものです。

THE FUTURE IS ART
Tokyo Tokyo FESTIVAL

本展のみどころ

１｜自然界の報道写真家・宮崎学が伝える「野生動物のイマ」

本展は宮崎学の初期作品から撮りおろしの最新作まで、全７シリーズ（合計 210 点）で概観する、当館初の大規模な個展です。また、宮崎が長年培った生態観察力と撮影技法が盛り込まれた最新作〈新・アニマルアイズ〉〈君にみせたい空がある〉を、本展で世界初公開いたします。

近年、人間中心の視点で自然を語ることが、自然保護ではなく、自然保“誤”になっているのではないか、と疑問をもった宮崎は、「文章で長々と語るより一枚の写真から何百字、何千字という言葉を紡ぎ出せるような撮影を心がけた。」と語ります。宮崎は長年独自の自然観に基づき、日本の山野における動物相の変化を鋭敏に感じ取った宮崎が、言語を越えた写真表現で伝える、「野生動物のイマ」にご注目ください。

２｜生命とは、人間とは、そして自然とはなにか。

「死はたべられることで、ほかの生きものの、いのちにかわっているんだ。もしかしたら、死ぬことも、いのちとおなじくらい、たいせつなことなんじゃないだろうか。だから、ぼくは、いっしょうけんめい死を食べて、いっしょうけんめい生きたいと思う。きみは、どう思うだろうか。」*

本展では、森のなかで起こる、野生動物たちの死をめぐるドラマを克明に写し出したシリーズ、〈死〉(1994)、〈死を食べる〉(2012-15)を時系列的に紹介します。さまざまな生きものたちの「死」から「死のおわり」までをみつめ続けた宮崎のまなざしに、大人から子供まで、それぞれの視点を重ねて自然界の摂理に向き合うことができる、貴重な機会となることでしょう。

*宮崎学『アニマルアイズ　動物の目で環境を考える２　死を食べる』偕成社、2002 年より一部抜粋

３｜ロボットカメラの眼がとらえた驚異の世界

昼夜問わず、日本中の野生動物たちを追う過酷な撮影を続けた宮崎は、人間の身体の限界を痛感し、約 4 年の歳月をかけて、赤外線感知装置に直結した「ロボットカメラ」を開発しました。他に類を見ない、ロボットカメラによる無人撮影の実現化によって、人間の存在を意識しない、野生動物たちの素の表情や知られざる生態を視覚的にとらえることに成功します。本展では、1976 年から現在も続く〈けもの道〉をはじめ、動物の視点で森の中の日常を観察する最新作まで、宮崎の相棒ともいえるロボットカメラの眼がとらえた、人間の身体・想像力をはるかに超えた野生動物たちの驚くべき世界にご注目ください。会場では宮崎が自作したロボットカメラも展示します。作品に加え、豊富な資料から、宮崎の探求心の源泉に触れることができる展覧会です。

展示構成と出品作品紹介

第１章　〈ニホンカモシカ〉

宮崎が本格的に野生の動物の生態写真を撮影し始めた 1965 年前後、野生のニホンカモシカは「まぼろし」と形容されるほど、出会う機会が少なく、撮影は至難の業とさえ言われていました。

　宮崎は 1965 年 3 月頃からニホンカモシカの綿密な生態観察を始め、中央アルプスの亜高山帯に生息する 33 頭のカモシカを個体識別し、四季を通じて生活を追い、宮崎によって次々に地図の上に記されていく目撃情報と生態写真は、生物地理学上、あるいは進化史上での貴重な記録となりました。

1〈ニホンカモシカ〉より 1970-1973 年

（中央アルプスの稜線から下界を見下ろすニホンカモシカ）

第２章〈けもの道〉

宮崎は、登山道に無人撮影できるロボットカメラを設置し、四季を通じてそこに出現する様々な野生動物たちを撮影しました。それまでに類を見ない斬新な撮影方法と、無人撮影だからこそ撮影可能な野生動物たちの自然な表情は高く評価され、40 年以上たった現在も〈けもの道〉をテーマにした撮影は続いています。
本章は〈けもの道〉1976-1977 、〈倒木のけもの道〉2012-2013、〈岩田の森のけもの道〉2012-13 の 3 シリーズで構成いたします。

2-1《テン》〈けもの道〉より 1976－1977 年 東京都写真美術館蔵（その昔、中央アルプスで獲れるテンの毛皮は一等品とされていたと聞く。このテンの毛皮を見る限り、それを裏づけているような気がする）／2-2《キツネ》〈倒木のけもの道〉より 2012-2013 年（口いっぱいに獲物をくわえて家路を急ぐ）／2-3《ツキノワグマ》〈岩田の森のけもの道〉より 2012-13 年

第３章〈鷲と鷹〉

宮崎は国内に生息する猛禽類 16 種類すべてをカメラに収めるため、北は北海道の知床半島から南は沖縄の西表島まで、鷲と鷹を追い求めました。ワシやタカの生息域は、人里離れた山の中や、断崖、岩場、離島だったため、撮影にはカメラ機材一式とキャンプ道具を車に積み、野営につぐ野営で撮影が続きました。約 15 年の歳月をかけて完成したこれら貴重な生態記録により、宮崎は日本における猛禽類生態写真の第一人者となりました。

3-1 《クマタカ》（鋭い目つきで周囲をうかがうクマタカ）／3-2 《ハチクマ》（オスが持ってきたハチの巣をくわえ、翼をふるわせて歓喜するメス）ともに〈鷲と鷹〉より 1965-1980 年　東京都写真美術館蔵

第 4 章〈フクロウ〉

フクロウは姿もいい。フワフワの羽毛につつまれたまる味のある形が、なんとも愛らしい。それでいて、猛禽類のもつたくましさが感じられる。さらに、夜行性ということで、その生活のすべてが神秘のベールにつつまれていて、その生き方を私たちに想像させるだけである、これもまた不思議な魅力である。（宮崎学『フクロウ』平凡社、1989 年）

4 《巣立ちが近いヒナ》〈フクロウ〉より 1982-1988 年 東京都写真美術館蔵

（愛らしい表情のなかにも野生のもつ猛々しさがある）

第 5 章〈死〉

――〈死〉1994 年

輪廻転生　目を背けてはならない、とおもいながら、ファインダーをのぞいていた。

鼻が曲がるかとおもわれるほどの死臭が漂うこともあり、ハエのウジが体皮をやぶって湧き出してくることもある。怯むことなく見つめていると、そこにはふしぎなドラマが展開されていた。

「死は生の出発点である」私は、自然の新しい摂理を、生きものたちから学んだ。（宮崎学『死』平凡社、

5-1、5-2、5-3《冬の死・二ホンジカ 1993》〈死〉より　1994 年　※5-1、3 は東京都写真美術館蔵

（左から 1 月 27 日 6 時 36 分、2 月 13 日 23 時 56 分、3 月 20 日 17 字 32 分）

――〈死を食べる〉2012-15 年

動物たちの死を見つめることで、「生命」とはいったい何なのだろうかと考え続けてきた。そして、「食うために生き、生きることが森を潤し、死ぬことがさらに自然をなめらかに潤滑させる」ということが分かった。（宮崎学のブログ「森の命を思う」［『フォトエッセイ 森の動物日記』2013 年 9 月 5 日より］）

5-4《イノシシが死体を食う作法は内臓から…》／5-5《冬のリスはタヌキの死体から動物脂肪を求めていた》ともに〈死を食べる〉より 2012-2015 年

第 6 章 〈アニマル黙示録／イマドキの野生動物〉

人間と野生動物の関係も宮崎の重要なテーマとなっています。1993 年から 2012 年まで、長期にわたって、人間の生活空間近くに出没する野生動物を通して人間社会を描いたシリーズ〈アニマル黙示録〉に加え、現代社会にたくましく生きる野生動物を活写した〈イマドキの野生動物〉を紹介します。

6-1 《漂流物の台所洗剤のキャップを宿にしたオカヤドカリ》（「ヤクルト・ヤドカリ」や「キユーピー・ヤドカリ」も。いまや世界中の海は私たちの身近なゴミであふれかえっている）／6-2 《捨てられたスイカの山に群れるイノシシの家族》／6-3 《東京の新興住宅街の田んぼで暮らすキツネ》すべて〈アニマル黙示録／イマドキの野生動物〉より 1993-2012 年

第７章｜新・アニマルアイズ／君に見せたい空がある　最新作

――〈新・アニマルアイズ〉2018-2021

本シリーズは、動物の住む森を動物の目線から見ることをコンセプトに、動物たちの痕跡をもとに、その生活や行動を注意深く読み解きながら、森の中の屋外スタジオに自作のロボットカメラを設置し、人間の目が及ばない瞬間を写し出した最新作です。圧倒的な臨場感をもった映像の数々は、まるで彼らの隣に居合わせたかのような迫力で見るものを圧倒します。

7-1（獣害対策で野生動物が里に来ないようにフェンスを設置するも、平気でよじ登り突破するツキノワグマ。頭の影が幹に映り、野生のたくましさを認めざるをえない）/7-2（夜行性のムササビは樹洞の巣で寝起きの伸びをした）

ともに〈新・アニマルアイズ〉より 2018-2021 年

――〈君に見せたい空がある〉2018-2021

レンズをなめられるほど、カメラの近くに来てもらうため、動物たちの行動を予測し、画面に写し込んだ作品は、それまで宮崎が培った技術のすべてが盛り込まれた集大成となっています。動物たちが森の中でどのような暮らしをしているのか、彼らの目線から知ることができるシリーズです。

7-3《ニホンザル》〈君に見せたい空がある〉より 2020-2021 年

（サルの家族がレンズを怪訝そうに見つめていた）

出品シリーズ　出品点数 計 210 点、資料 約 20 点

第１章｜〈ニホンカモシカ〉 1970-1973
第２章｜〈けもの道〉 1976-1977／〈倒木のけもの道〉2012-2013／〈岩田の森のけもの道〉2012-2013
第３章｜〈鷲と鷹〉 1965-1980
第４章｜〈フクロウ〉 1982-1988
第５章｜〈死〉 1994／〈死を食べる〉2012-2015
第６章｜〈アニマル黙示録〉／〈イマドキの野生動物〉 1993-2012
第７章｜〈新・アニマルアイズ〉 2018-2021／〈君に見せたい空がある〉 2020-2021

作家紹介

宮崎 学｜Miyazaki Manabu

撮影｜飯塚 淳

1949 年長野県生まれ。自然と人間をテーマに、社会的視点にたった「自然界の報道写真家」として活動。「けもの道」を中心としたほ乳類及び猛禽類の撮影では自作の自動撮影カメラを駆使し、独自の分野を開拓する。近年では日本各地で問題となっている獣害被害のアドバイザーとしても活躍。1978 年『ふくろう』で第 1 回絵本にっぽん大賞、1982 年『鷲と鷹』で日本写真協会新人賞、1990 年『フクロウ』で第 9 回土門拳賞、1995 年『死』で日本写真協会年度賞、『アニマル黙示録』で講談社出版文化賞を受賞。他、写真集、著書多数。

展覧会公式図録

『イマドキの野生動物』価格未定、全 204 頁、東京都写真美術館発行
宮崎 学（出品作家）、水越 武（写真家）、関次和子（東京都写真美術館学芸員）による論考。出品作品リストのほか、作品図版を多数掲載。ミュージアム・ショップ店舗とオンライン・ショップで発売。

関連事業

本展関連イベントの詳細は、決定次第、当館ホームページにてお知らせいたします。

開催概要

展覧会名[和] 宮崎学 イマドキの野生動物
展覧会名[英]　Miyazaki Manabu: Wild Animals Now
主　催｜公益財団法人東京都歴史文化財団　東京都写真美術館
後　援｜信濃毎日新聞社
協　賛｜株式会社ニコン／株式会社ニコンイメージングジャパン／東京都写真美術館支援会員
協　力｜株式会社モンベル
会　期｜2021 年 8 月 24 日(火)―10 月 31 日(日)
会　場｜東京都写真美術館 2 階展示室
開館時間｜10:00-18:00（入館は閉館 30 分前まで）
休館日｜毎週月曜日（ただし 8 月 30 日、9 月 20 日は開館)、9 月 21 日（火）
観覧料｜一般 700 円／学生 560 円／中高生・65 歳以上 350 円

オンラインによる日時指定予約（推奨）

オンラインで購入可能な券種は、「一般のみ」となります。学生、中高生・65 歳以上、各種割引のチケットをご購入の方、および無料対象者［小学生以下、都内在住・在学の中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者（2名まで)、招待券・年間パスポートをお持ちの方］は、オンラインチケットの対象外です。

本リリースの問い合わせ先

本リリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。掲載をご希望の際は広報担当までご連絡ください。
＊図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
＊図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM
〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 /www.topmuseum.jp
企画：関次和子　k.sekiji@topmuseum.jp
担当：石田哲朗　t.ishida@topmuseum.jp / 鈴木佳子 y.suzuki@topmuseum.jp
広報担当　平澤綾乃 / 池田良子 / 鈴木彩子　press-info@topmuseum.jp

事業はやむを得ない事情で内容を変更することがございます。最新情報は広報担当にお問合せください。